

キリスト教史学会 50 年史 (1949~1998)

吉田 寅 花島光男

I. キリスト教史学会の創立

キリスト教史学会が創立されたのは、第二次大戦後の混乱も次第に落ち着いてきた 1949 (昭和 24 年) のことである。創立計画の中心となったのは、海老沢有道・片子沢千代松の両氏であり、1947 年の夏頃より横浜において度々の協議を重ね、諸般の準備を推進した。

そして石原謙・神崎驥一・桑田秀延・小崎道雄・坂田祐・斎藤惣一・佐々木順三・豊田実・村田四郎・眞鍋頼一・平賀徳造・矢野貫城・山本忠興・湯浅八郎の諸氏を賛助員とし、有賀鉄太郎・魚木忠一・海老沢有道・大和久泰太郎・片子沢千代松・気賀重躬・重久篤太郎・高谷道男・野々村戒三・比屋根安定・福田正俊・溝口靖夫の諸氏を發起人として、49 年 4 月に趣意書・会則を発表する運びとなったのである。

キリスト史学会の特色の一つは、超教派的な学会であることである。当時、エキュメニカル運動は、プロテスタント諸派の動向の一つとして WCC などを中心に行われていたが、未だローマ教皇ヨハネス 23 世の教書発布や第二ヴァティカン公会議の以前のことであり、カトリックとプロテスタントが、一つの共同体的団体を組織することは殆どなかっただけに、これは特筆すべきことであった。

設立趣意書・会則・入会申込書が配付されたのは 49 年 4 月であるが、設立準備委員会の努力によって広報活動は順調に進行し、この年の 10 月 16 日、東京 Y M C A において発会式兼第一回講演会が挙行されることとなった。この発会式でははじめに海老沢氏の「明治初年における宗教自由の問題」と、石原謙氏の「中国伝道の開拓者」と題する二つの講演がおこなわれた。講演会のあと創立総会の議事に移り、会則等が承認され、ここにキリスト教史学会 (創立時の表記は基督教史学会) は創立の第一歩を印することとなったのである。

会員数は、49 年 10 月の名簿では、賛助会員 14、特別 (団体) 会員 8、普通会员 58 で計 80 名となっている。なお創立当時の会費は、普通会员は年額 300 円、特別会員は 600 円とし、賛助会員の会費は、特に金額を定めない規定となっていた。

キリスト教史学会会報の第 1 号は、49 年 11 月 30 日に刊行された。第 1 号の巻頭言である「プロテスタント百年記念に備えよ」および学界展望の「今年度の日本基督教史学界」は、共に片子沢氏が執筆したものであり、他に学界余滴として、海老沢氏が随筆風に、幕末期における「聖書の闇値」を紹介している。

第 2 回講演会はこの年の 12 月 4 日、横浜 Y M C A でおこなわれ、野々村戒三氏「明治基督者の面影」と片子沢氏の「明治初年の仏耶の交渉」が演題であった。この時の野々村氏の講演の梗概は、会報第 2 号にまとめられている。

第 2 号には会報の雑録として、会員の誌上自己紹介があり、①職業 ②専門の学科及び特に研究している分野 ③主な著書及び論文等 ④今年特に研究したいと思っている課題 ⑤其の他 (希望・趣味・珍しい史料等) が簡単に紹介されている。この企画は第 4 号まで続けられており、計 32 名の会員が自己紹介をしているが、創立期の読者にとっては大変興味深い記事であった。

第 3 号には巻頭に片子沢氏の「新しき飛躍のために」の文章があり、第 4 号には時田信夫氏の「米国における短期大学発達史」および楠本義郎氏の「イエスは教会形成を意図したか」等の論稿が掲載されている。

第 5 号には「基督教史学会会則 (抄)」が採録され、また「基督教文庫発刊趣意」が紹介された。以下にもその一部を引用する。

わが基督教史学会が創立日なお浅いにもかかわらず、ナツメ社主田村喜久蔵氏の営利を度外視した犠牲的熱意に援けられ、ここに基督教文庫を発刊、セクト主義に陥ることなく広く神学教会史はもとより、

社会科学・自然科学から文芸一般にわたりキリスト教の諸相と世界文化とをあらゆる角度から究明した新研究と、内外キリスト教古典とを簡明平易に解説し、しかも最低価格をもって愛する同胞に提供しようとする微意もまたそこに存する。

聖籠の下、永遠の真理を求め祖国を愛する士の支持を得て、この困難な計画が全うせられるよう願ってやまない。

1951年12月

基督教史学会

基督教文庫は、三六判120頁内外の文庫本として刊行され、定価は70円前後であった。第5号の近刊目録に掲載された書名と執筆者は左記のようである。

「現代日本宗教の史的制約性」	海老沢有道
「吉利支丹文学ノート」	窪田幸夫
「ヘボン訳新約聖書・校註」	片子沢千代松
「近代日本文学と基督教」	笹淵友一
「讚美歌解題」（古典篇）	牧野伴人
「ピューリタニズム」	野々村戒三
「ジョンウエスレー」	気賀重躬

第5号にはまた51年10月現在の会員名簿が掲載されている。これによると、特別会員8、賛助会員14、正会員85、客員7となっており、創立期に比べてみるとかなりの増加が明らかとなっている。

会報6号は、タブロイド版の新聞の形成で作成され、海老沢氏の「ゼズス会の日本人奴隷禁止運動の意義」と、助野健太郎氏が1951年度の学界を展望した「日本基督教史学界とその出版物」が主要な記事となっている。

創立期のキリスト教史学会を襲った大きな不幸は、1952年1月5日夜半、関東学院大学学生寮より発生した火災であった。この火災は寸時に学院研究室および職員寮に延焼した為、当時学院内に在ったキリスト教史学会本部も類焼の厄に遭い、一切の備品・文献等は烏有に帰してしまった。また職員寮に居住しておられた片子沢千代松・八木一男・中居京・柴三九男・富田富士雄の諸氏もそれぞれ罹災されたのである。このように大きな痛手を受けたにも拘わらず、キリスト教史学会の学会活動は久しからずして再開され、再開後暫らくして刊行された第7号には、片子沢氏の「基督教史学会の性格」を巻頭言とし、基督教史研究講座や、第3回大会の紹介記事等が掲載されている。創立期に学会本部および会員が受けた大きな打撃にも拘わらず、試練を乗り越えて活動を再開したキリスト教史学会の姿が、象徴的に示されているものとみることができる。

II. 『基督教史学』の刊行と初期の全国大会

キリスト教史学会創立の当初より学会誌の定期的刊行が企画されていたが、当時の出版界の情勢は非常にきびしいものであり、会報第2号には「研究報告発刊に就いて」と題し、次の記事が掲載されている。

研究報告発刊の希望が多いのですが、交渉中の出版社が経営危機に直面してその運びに致りません。幸ひ横浜に奉仕的に印刷して下さる印刷所があるので、300部限定版として発行いたします。会員の方は研究された原稿を本会宛お送り下さい。

このような状況の中において、さまざまな困難を克服し、『基督教史学』第1輯が刊行されたのは、51年4月1日であり、収載論文は次の4篇であった。

相沢源七	カルヴィニズムの特質
海老沢有道	幕末における基督教科学書の出版
片子沢千代松	日本におけるイエス伝
助野健太郎	日本切支丹期における邦人伝道者の養成と活躍

(第一輯は、108 頁の構成で、奥付には非売品とあるが、頒価 120 円、送料 12 円で頒布された)

編輯後記には、刊行に関し経済的、精神的な支援を受けた基督教教育同盟会と、印刷者石川福次郎氏に対する謝辞が述べられている。

第 2 輯は 52 年 5 月に刊行され、巻頭の半田元夫氏の「皇帝崇拜と基督教」を含め、計 7 篇の論文が掲載され、156 頁の構成となっている。編輯後記には、以下のように示されている。

本誌の編輯が軌道にのったのは、昨年の 9 月でありましたが、印刷所の都合や、本部の焼失などで、発行が意外に遅くなり、各方面に多大の迷惑をかけ恐縮に存じます。……それについても会員諸賢のたえざる御援助、基督教教育同盟会の御援助こそ、本学会、本誌の発展を促す原動力であることを痛感致しました。

〔『基督教史学』『キリスト教史学』の第 1 輯より第 50 集については、第 50 集に、各号の内容、執筆者一覧を掲示したので、参照していただければ幸甚である。〕

キリスト教史学会の第 2 回大会は、50 年 10 月 21 日、立教大学において開催され、下記の両氏による講演がおこなわれた。

秀村欣二	コンスタンチヌス帝とキリスト教
柴三九男	アジア的社会とキリスト教

キリスト教史学会の初の全国大会ともいべき第 3 回大会は、52 年 8 月 11 日、12 日の両日、横浜 Y M C A にて開催された。会報第 9 号には、「創業辛苦三年の結実、初の全国大会開催」の見出しのもとに、次の記事が掲載されている。キリスト教史学会の創立より全国大会開催に至るまでの経緯が簡潔に要約されている文章であるので、以下に最初の部分を引用する。

昭和 24 年 10 月、石原謙・野々村戒三・魚木忠一・有賀鉄太郎・海老沢有道・片子沢千代松氏等の発起に依り、東京 Y M C A に於いて創立の孤声を挙げたる本学会は、以来一年間は、横浜 Y M C A ・関西学院・立教大学等に於いて、臨時例会を開き、会報を出す等して、地味な、而して基礎的な働きを続けて来たが、昭和 26 年 4 月に至り、漸く「基督教史学」第一輯を世に送り出す頃より俄然本格的活動に入り、本部事務局を関東学院大学内に設置して、新に海老沢有道・秀村欣二・片子沢千代松・助野健太郎の諸氏を以て本部員とし、毎月委員会を開いて熟議した結果は、神田ナツメ社社主田村氏の協力を得て「基督教文庫」の発刊を行い、更に会報の隔月刊制を樹立し、次いで「基督教史学」第二集の編纂に掛る等、順次新計画の実践に努力して来た。本年初頭の火災は、一時、会の計画に頓挫を来たすかの如く杞憂されたが、幸にも会員各位の絶大なる御援助と、全国各大学の変らざる御協力とに依り、旧に倍する学会の復興をとりもどし、四月には見事な雑誌第二輯を世に送る事が出来、基督教史研究ゼミナールも開催され、全く学会としての面目を中外に発揮するに至ったのである。

会報第 9 号の新入会員紹介欄には、三笠宮殿下・岡本良知氏他 15 名が紹介されており、会員数が着実に伸張していったことを示している。

第 3 回大会は、キリスト教史学会の順調な発展を象徴したものであり、公開講演として、魚木忠一氏の「史学と宗教的現実」、湯浅八郎氏の「アメリカの学問と生活」があり、大会における研究発表者は 13 名であった。なお

研究発表要旨は、『基督教史学』第3輯に掲載されている。

1952年度末尾において、東北支部が結成されたこともまた注目すべきことである。キリスト教史学会の発展に伴い、各地方支部の設立が早くより要望されていたが、ついにその機が熟し、12月6日、仙台市尚綱女学院短期大学において、発会記念講演会、支部結成式、懇話会が挙行された。

キリスト教史学会の第4回大会は、53年8月4日、第3回と同じく横浜YMCAにおいて開催された。大会における研究発表者は17名であり、公開講演は、榊原巖氏の「基督教経済倫理」と定金右源二氏の「聖書に導かれた考古学」であった。また当日会場において、「横浜関係基督教史展覧会」が開催され、参会者に大変好評であった。

第4回大会で特筆すべきことは、この大会において会長の選出と評議員の決定等がなされたことである。キリスト教史学会の発足当時においては、会員数も少なかった為、会長の選出を暫らく延期し、本部幹事会の合議制によって諸問題を処理してきたが、会員数が200名を越えるに至ったので、会長・役員を選出し、学会としての機構を整えることが緊急な課題となってきた。このような情勢により、すでに第3回大会の総会において海老沢・片子沢両幹事を会長制実行委員に挙げ、鋭意、会長推戴の人選に努力した結果、漸く推薦候補者として野々村戒三氏の就任承諾を得ることができたのである。また第4回総会に先立つ4月の幹事会において部会並に専門委員制の採用が、5月の幹事会において評議員会の設置が支持され、6月の幹事会までに全国より15名の評議員を推薦することができることとなった。このような準備段階を経たあと、第4回大会の総会において、会長以下、評議員・専門委員・幹事・支部役員等が、正式に決定されることとなったのである。総会で決定された役員を中心とする役員一覧表をまとめてみると下記のようなようである。

基督教史学会 役員

会長 野々村戒三

評議員 有賀鉄太郎 家永三郎 石原謙 魚木忠一 海老沢有道 大塚節治 岡本良知 気賀重躬
桑田秀延 定金右源二 高橋虔 豊田実 野々村戒三 松田智雄 村田四郎 山中謙二

(本部) 片子沢千代松

賛助員 今田恵 賀川豊彦 小崎道雄 坂田祐 斎藤惣一 佐々木順三 眞鍋頼一 矢野貫城
柳田国男 湯浅八郎

幹事 研究部 海老沢有道 秀村欣二 小野三沙子

業務部 片子沢千代松 助野健太郎 波多野和夫

東北支部

支部長 池田哲郎

副支部長 仲瀬武

幹事 相沢源七

専門委員

○キリシタン部会 今村義孝 岡田章雄 助野健太郎 田北耕也 平重道 松田毅一 吉田小五郎

○日本プロテスタント史部会 小野三沙子 片子沢千代松 高谷道男 波多野和夫 武藤誠

○東洋史部会 柴三九男 白鳥芳郎 長瀬守 溝口靖夫 宮原兎一

○西洋史部会 池田哲郎 半田元夫 秀村欣二 満江巖 藤井誠

(海老沢有道は研究部門の代表幹事として各部の専門委員を兼任)

キリスト教史学会の第5回大会は、54年7月10日・11日の両日、立教大学において開催された。本大会における研究発表者は19名であり、公開講演は松田智雄氏の「改革者ルッターにおけるクライリッヒ・ハイトについて」と、石田幹之助氏の「貞享年間ポルトガルの日本布教再開運動について」であった。

総会では、第一議題として、キリシタン史部会を日本カトリック史部会とし、明治以後の日本におけるカトリック教会史及び日本正教会史を対象に加える件（海老沢氏提案）および、第二議題として、日本正教会史部会設置の件（岩間徹氏提案）が提出され、右の両件は類件であるので一括審議することとなった。審議の結果、原案は共に否決され、秀村欣二氏が妥協案として提出された「部会名は現状の儘にして、正教史研究については、別に研究グループとしての活動を認め、将来充実大成の暁に、部会として独立する」ということに落着くこととなった。この審議によって日本正教史研究に始めて組織化の動きがおこったことは特筆すべきことである。

第六議題では、新規事業の件として、邦文研究文献雑誌論文目録の編纂刊行の件が協議された。キリスト教史学会の出版事業として、ナツメ社刊の基督教文庫が相次いで刊行されたことについては前述したが、54年には『日本基督教史関係文献和漢書目録』（海老沢有道監修）が文晁堂書店より刊行され、このような文献目録がなかっただけに、学界に裨益することが多大であった。

新規事業はこのあとを受け、この年度よりキリシタン史・日本正教史・日本プロテスタント史・東洋キリスト教史・西洋キリスト教史の各部毎に、研究文献雑誌論文目録を刊行することを企画したものである。この議案は可決され、会報第20号には次の記事が掲載されている。

「基督教史研究論文目録」作成について

会報第19号によって御承知の如く、第五回総会の申合せにより、本学会ではキリスト教史研究の発展のために日本、東洋、西洋に分って表記目録を共同編集致すこととなりました。各部会専門委員はそのために雑誌類の調査に当たることは勿論であります。全会員各位も積極的にこの企てに参加せられ、地方雑誌或は特殊誌等、委員の目に触れぬ恐れのあるものから是非関係論文を採録本部宛御報告願います。かつ本会員各位の御執筆論文は洩れなく採録致度存じますので、左記要項により、必ず昭和30年12月末日までに同様御報告願います。

採録期間 明治元年～昭和30年

採録記事 著訳編者名、題名、掲載誌又は発行書店、巻号、発行年月

備考 題名でハッキリしないものは分類のため簡単に内容を指示されたい。例、日本新教・思想、西洋中世芸術

この事業の一環として、55年4月、『東洋キリスト教史研究文献目録（稿）』（吉田寅編）が、東京教育大学アジア史研究会より刊行された。

『基督教史学』第4輯は、「特輯 キリシタン史論叢」として、53年12月刊行された。本号は特輯名が示すように、会員によるキリシタン史研究の論文を集成したものであり、256頁に及ぶ大きな論文集となっている。

東北支部の結成に続いて阪神支部が成立したのは54年1月であり、印具徹氏を支部長、溝口靖夫氏を副支部長、武藤誠氏を幹事として、本格的な活動を開始することとなった。

『基督教史学』第5輯は54年12月の刊行であり、論文5篇を掲載したあと、資料として海老沢氏の「聖書と訳史余滴」他2篇を掲載し、更に『基督教史学』（第1輯～第5輯）の総目次や、「キリスト教史学会会報」（第1号～第19号）掲載の主要論文を掲示するなど、入念にして多彩な編集方針を示している。なお最終ページの下部には、以下のような入会案内ともいべき文章が呈示されている。

「基督教史学会案内」

教会・教派に関係なく、キリスト教を史的研究対象とする全国の研究者・同好者をもって、一九四九年創立された純然たる学会で、機関紙「基督教史学」（年二回）の刊行の他、会報・諸種出版をなし、年一回の学術大会・展覧会・各支部例会・部会ゼミナール等を行っている。会員は機関誌及び会報の無料頒布を受け、投稿し、また特定図書館の閲覧、取扱図書割引・研究上の質疑等の便宜等を受けるこ

とができる。

現在、西洋史・東洋史・日本プロテスタント史・キリシタン史の四部会、関東・東北・阪神の三支部がある。会費は年額五百円、入会希望者は会費及び専攻部門・職業・住所を記入の上、事務局宛申込みた

い。

役員の名については、第4回大会で決定したあと、若干の増補、変更や組織替えがあったので、前掲の役員一覧表とは稍異なってきた。先の「基督教史学会案内」の末尾に付記されている役員名を見ると、評議員には岩生成一・菅円吉の両氏が、幹事には長瀬守・山本澄子の両氏がそれぞれ加わっていることが明らかである。（役員については、これより以後も若干の変動があったが、小異動については省略した）。

Ⅲ. キリスト教史学会の発展（1955～69年）

本章では、1955年以後におけるキリスト教史学会の軌跡を概観することを主眼とし、具体的には各年度の大会を中心として学会の活動を考察し、またその年度におこった会務運営上の重要事項などについて見てゆくこととする。

第6回大会は、55年7月29日、30日の両日、国際基督教大学で開催された。この大会では20名の研究発表があった他、第1日には岡本良知氏の「南蛮屏風について」、第2日には、田北耕也氏の「潜伏キリシタンにおける教会制の名残と典礼の許容」の特別講演があった。この大会の両日はきびしい猛暑に見舞われたが、全国より約100名の会員が参集し、熱心な研究活動が展開された。

第7回大会は、56年6月8日・9日の両日、関西学院大学を中心として開催された。第1日は、関西学院大学における研究発表のあと、参会者が揃って聖和女子短期大学に移り、「キリスト教幼児教育に関する歴史資料展覧会」を見学した。この展覧会では、メーベル=ホワイトヘッド・山川道子・桧垣逸代の3氏が解説を担当された。次いで神戸女学院大学図書館に一同で赴き、「日本の讃美歌展覧会」を参観した。ここでは溝口靖夫氏が解説された。

第2日は、関西学院大学における研究発表のあと、大阪市中の島の朝日新聞社講堂において特別講演会があり、海老沢有道氏は「禁書令に関する諸問題」と題し、また飯島幡司氏は「ピオ12世の日常生活」と題し、それぞれ講演された。

第8回大会は、57年6月7日・8日の両日、青山学院大学で開催された。この大会では、研究発表のあと、第1日には、田北耕也氏が「欧米教会の現況」と題し、第2日には、豊田実氏が「聖書和訳の歴史」と題して講演された。なお豊田氏の講演に際しては、この大会において特別展示された日本語訳の聖書についての解説もおこなわれた。

第9回大会は、58年9月1日・2日の両日、横浜市金沢区の関東学院大学で開催された。この大会では、キリスト教史学会10周年の歩みに関する資料の展覧会が開催され、「基督教史学会会報」「基督教史学」等の刊行物も多数展示された。

研究発表の他、第2日の午前には、海老沢氏の司会のもとに、学界動向の報告と、それについての討論がおこなわれた。各部会毎の報告者は左記のようである。

キリシタン史	助野健太郎
日本プロテスタント史	大内三郎
東洋史	宮原兎一
西洋史	相沢源七

第2日の午後は、バス見学旅行を実施し、片子沢・助野両氏および土田豪州氏の解説で、金沢文庫より横浜に

及ぶキリスト教関係の史蹟を見学し、横浜駅西口において解散した。

第10回大会は、59年6月20日・21日の両日、東北大学文学部および仙台白百合学園を会場として開催された。この年は、カトリック再宣教、ハリストス正教会ならびにプロテスタント宣教百年に当り、またキリスト教史学会創立10周年にも当たっていて、誠に慶賀すべき年であった。

大会における発表申込者が多かった為、本大会において初の二部制（第1日は西洋史部会・日本史関係部会の二部に分けて並行発表）による研究発表がおこなわれた。また第1日の研究発表のあと、三笠宮殿下が「最近のパレスティナの考古学的調査について——パツオル遺跡を主題として——」の特別講演をされた。

大会第2日は白百合学園を会場として、最初にキリシタン部会および東洋史部会の研究発表があり、そのあと「東洋社会とキリスト教」を主題とする討論会がおこなわれた。報告提案の発議は、光島督・小野忠亮・尾山令二・岩間正光の4氏によっておこなわれ、家族制度をはじめ東洋的社会の問題、デノミネーションによる障害等がとり上げられて活発な議論を展開したが、時間の都合により結論を次年度以降に持越して閉会した。

第11回大会は、60年9月2日・3日の両日、聖心女子大学・東洋英和女学院を会場として開催された。

第1日は聖心女子大が会場であり、研究発表と同時に、「明治初期カトリック出版物展示会」が挙行され、参加者は貴重な書籍などを熱心に見学した。

第2日は東洋英和女学院短期大学を会場とし、研究発表のあと、次の両氏による特別講演がおこなわれた。

武田清子 「近代日本におけるヒューマンイズムの発想形態」

印具 徹 「最近の欧州における基督教史研究の状況について」

第12回大会は、61年6月9日・10日の両日、近江八幡市の近江兄弟社を中心として開催された。

第1日は近江兄弟社の講堂を会場とし、研究発表がおこなわれたあと、午後の後半より見学の行事に入り、まず近江兄弟社のメンソレータム工場を見学、次いで2台のバスに分乗して、近江兄弟社図書館（近江八幡と近江兄弟社の歴史展見学）、近江八幡神社、近江兄弟社学園、安土セナリオの跡、安土総見寺、近江サナトリウムを参観したあと、宿舎の長命荘に入った。

夕食後、7時30分より近江兄弟社講堂において、市民講演会が開催され、次の両氏による特別講演があった。

海老沢有道 「安土桃山文化とキリスト教」

山中謙二 「近代世界の形成とキリスト教」

第2日は、午前中、長命荘を会場として研究発表をおこなったあと、午後は第2回目の見学コースに入り、はじめに長命寺を参観し、次いで琵琶湖遊覧船に乗船して明媚な風光を楽しみ、大津港に到着して解散した。

会報48号（52年4月刊）は特集記事として「研究動向」を掲載しており、各部会がそれぞれ、前年度の研究文献もしくは研究動向をまとめている。

キリシタン部会は、既に会報17号（54年3月刊）より、各年度の研究文献目録を継続的に掲げており、本号においても、61年1月より62年3月に至る間の研究文献を集成している。

日本キリスト教史・東洋キリスト教史・西洋キリスト教史の各部会は、48号において、「回顧と展望」の形式で前年度の主要な研究文献を展望しており、この形成は51号にも継承された。（51号には、キリスト教学の分野も加わっている。）

後述のように、会報55号を以って従来の形式の会報が新形式に移行した為、会報における学界動向欄が発展しなかったのは残念であるが、短い時期ではあっても、各部会が研究動向の紹介に積極的であった熱意をみてゆくことができる。

——ここまで

第13回大会は、62年6月15日・19日の両日、明治学院を会場として開催された。

第1日は、午前の研究発表のあと、高谷道男氏が本大会と同時に開催されたヘボン関係史料展示会について解説

され、そのあと展示会場の参観および明治学院学内の建物等の見学がおこなわれた。

午後は研究発表のあと、「東洋の近代化とキリスト教」を主題とする座談会があり、相沢源七（西洋史部会）・山本澄子（東洋史部会）・助野健太郎（キリシタン史部会）・工藤英一（日本プロテスタント史部会）の四氏が、それぞれの部会を代表して最初の発題をおこない、そのあとそれぞれの主題をめぐって活発な議論が展開された。

第2日は、午前中の研究発表がおこなわれたあと、午後は松田智雄氏が「ドイツのピエティズム」と題する特別講演をされた。

第13回大会の定期総会において特筆すべきことは、かねてからの懸案であった会則改正のことが正式に上呈され、会則改正委員が選任されたことである。会則改正の必要については、片子沢氏が「現在のキリスト教史学会は、小学会の会則のままで、会員全体の意向が反映されていない。全会員の意向を反映させる公的なものにするためには、全会員によって選任される理事を中心とする体制が必要であり、理事制への移行が適切であると思われる」という趣旨の説明をされ、討議の末、大綱としては賛成された。これにより改正委員として幹事の他、若干の委員を選出することが決定され、8月1日に開かれた幹事会で、左記の6氏が会則改正委員に決定した。

○幹事会より選出の委員……………片子沢千代松 助野健太郎 吉田寅

○一般会員より選出の委員……………佐々木忠一 園部不二夫 曾根暁彦

なおこの総会の席上、京都在住の会員により、阪神支部に京都・奈良の会員をも加えて関西支部とするように動議が提出され、印具徹阪神支部長もこれを諒承された。

第14回大会は、63年6月3日より5日にかけての3日間の日程で開催され、第1日、第2日は京都の同志社大学神学部を会場とした。

第1日は午前・午後の研究発表のあと、次の両氏による特別講演がおこなわれた。

富永牧太 「きりしたん版の印刷書誌」

ホセ=ルイス=アルバレス=タラドリス

「パードレ=アンシヤンドロ=ヴァリニャーノと商人イグナンオ=モレイラ」

第2日は、午前・午後の研究発表のあと、田中良一氏の解説と案内で、新島襄遺品庫の参観がおこなわれた。

第3日は、京都市より奈良の天理市に移動して行なわれた見学コースの一日であり、早朝、同志社大学前で観光バスに乗り、一路天理市に向った。午前中は天理図書館で、中村孝志・新井トシ・家入敏光三氏の解説をお聞きすると同時に、内部を見学させていただき、特に本大会のために特別に陳列されたキリスト教関係の稀観書を、至近の距離で参観した。午後からは天理教の本殿と参考館の収蔵品を見学し、その豊かな内容に驚嘆しつつ、3時にはバスに乗り、京都駅で解散した。

本大会の第1日に遂行された定期総会において、重要議題である会則改正原案が提出され、改正委員の佐々木忠一氏により要項の説明があった後、審議に入り、殆ど原案の通りに可決された。また会名の基督教史学会を、片仮名のキリスト教史学会とすることについても、原則的に承認された。この総会で、理事選挙は選挙管理委員会が選挙事務を担当することになり、選挙管理委員には現幹事が委嘱をうけた。この総会は延べ2時間半にわたったものであり、キリスト教史学会の現体制は、長時間にわたる熱心な討議の末に決定されたものである。

総会における会則改正承認を承け、8月に新会則に基づく役員選挙が行なわれて7名の理事が当選し、9月の当選者理事会において7名の理事を推薦した。このようにして選出された14名の理事により、10月に合同理事会が開催され、理事の分担を決定すると同時に、併せて監事・幹事を委嘱したことが、選挙管理委員会より発表された。新会則による第1回の役員会の構成は下記のようなものである。

理事長 海老沢有道

専務理事 片子沢千代松

財務理事 佐々木忠一

常務理事 松田毅一 松村菅和 助野健太郎 曾根暁彦 川崎肇

理事 石原謙 池田哲郎 印具徹 野々村戒三 定金右源二 高橋虔
監事 佐々木四郎 田村喜久蔵
幹事 波多野和夫 江原三七枝 吉田寅

なお各支部役員は従来通りで本会則にはよらず、各支部において適宜選出され、本部役員に準ずることとした。
東北支部・関西支部のそれぞれの役員は下記のように選出されている。

東北支部

支部長 今村義孝
副支部長 岩間正光
支部幹事 相沢源七

関西支部

支部長 印具徹
副支部長 溝口靖夫
支部幹事 武藤誠

第15回大会は、64年6月13日・14日の両日、東京の清泉女子大学で開催された。本大会においては、教会再一致問題が一つの共通課題として設定されており、第1日は研究発表のあと、次の両氏による特別講演があった。

沢田和夫 「カトリックにおける一致運動について」

石原 謙 「プロテスタント教会合同運動について」

第2日は、研究発表のあと、佐々木忠一氏の司会で、「教会合同問題について」を主題とするシンポジウムが開かれ、最初にT.V.ザイル・沢野六郎・曽根暁彦・小川恵子の4氏による発題があり、それをめぐって活発な論議が展開された。

この年のできごとの一つとして付言すべきことは、会誌「キリスト教史学」が年2回の刊行に躍進したことと、それに伴って「キリスト教史学会会報」の発行が発展的に解消したことである。

これは7月の常任理事会で決定されたもので、会誌の増刊を契機に、従来の会報の記事を会誌の巻末に掲載することとしたのである。会報55号（64年8月刊）には、本号を以て会報の最終号とすることの御挨拶が、御禮のことばとともに載せられている。

併し実際に会報が停刊となってみると、理事会の議事や、学会運営の状況等を、会員に伝達する広報手段がないことは非常に不便であり、この為、理事会の報告事項等を主な内容とする新形式の会報が復刊されることとなった。このようにして65年11月に、復刊第1号が、会報56号として刊行されたのである。

第16回大会は、65年7月2日より4日にかけて、長崎市を中心として開催された。

第1日は親和銀行大波止支店講堂を会場とし、共通論題「長崎とキリスト教」のもとに長崎に関係あるキリスト教史の諸問題について研究発表がおこなわれた。

第2日は、県立長崎図書館を会場とし、研究発表がおこなわれたあと、三笠宮殿下が「ペルセポリスの遺跡を訪ねて」と題し、スライドを使用した講演をされ、これに続けて次の両氏による特別講演がおこなわれた。

土井忠生 「日本語の多様性とキリシタン」

海老沢有道 「鎖国について」

第3日は、遺跡見学コースの一日であり、二十六聖人記念館、大浦天主堂、島原の原城址等を参観した。なお本大会の期間中、県立長崎図書館では、キリシタン関係文献の特別展覧がおこなわれた。

第17回大会は、66年8月26日・27日の両日、札幌市の北星学園において開催された。

第1日の午前中は、「北海道とキリスト教」を共通論題とする発表があり、午後からはそれぞれの論題による研究発表があった。

第2日は、第一日を承けて研究発表がおこなわれたあと、次の両氏による特別講演がおこなわれた。

松田毅一 「ルイス・フロイスの日本報告書」

秀村欣二 「ローマ帝国の没落とキリスト教」

本大会は、東北本線の事故や、台風による災害、札幌における宿舍予約の困難等の諸事情のため、出席予定者の取消しがかかりあって、例年に比し小規模な大会となってしまったが、関係者一同の努力により、内容は誠に充実したものであった。

第18回大会は、67年6月9日・10日の両日、立教大学で開催された。

第1日の午前は、共通論題である「江戸（東京）とキリスト教」を主題とする研究発表があった。午後はそれぞれの研究発表のあと、下記の両氏による特別講演がおこなわれた。

印具徹 「中世神学のミステーク」

岩生成一 「最後のポルトガル船」

第2日は、午前中の研究発表のあと、午後は観光バスにより、東京都内のキリスト教関係の史蹟（小石川キリシタン屋敷跡——ニコライ聖堂——筑地居留地跡等）を見学した。

第19回大会は、68年8月22日より24日にかけて、善通寺市の四国学院大学を中心として開催された。

第1日の午前は、「四国とキリスト教」を論題とする発表があり、午後はそれぞれの論題による研究発表に移り、終了後、一同で善通寺に赴き、管長である亀谷宥英大僧正の御案内で、寺内を参観させていただいた。

第2日は、午前中、四国学院大学で研究発表がおこなわれたあと、午後は会場を高松市の第百十四銀行ビルの大ホールに移し、次の両氏による特別講演がおこなわれた。

松田毅一 「四国とキリシタン」

海老沢有道 「明治百年とキリスト教」

第3日は史跡見学の一日であり、観光バスで屋島より丸亀港に向い、関西汽船の丸亀丸に乗船して塩飽諸島の本島に到着した。そして同島におけるさまざまな文化財を見学したあと、再び乗船して下津井に上陸し、そこから岡山にむかってそれぞれの帰路についた。

第20回大会は、はじめ東京都内の大学を会場に予定していたが、68年より69年にかけて各地でおこった大学紛争の余波が多く大学の及んでおり、大学を会場とすることは避けた方がよいという意見が、準備委員会において支配的となった。この為、急遽、都内市ヶ谷の私学会館が会場に選定され、69年9月26日、異例の一日だけの大会として開催された。とはいってもこの大会における研究発表者は20名に及んでおり、質疑や討論なども盛んであった。研究発表のあと、大島清氏が、「『旧約—新約』宗教における創造説話とゾロアスター教並にギリシア思想との結びつきについて」と題する特別講演をされた。

IV. 安定と停滞（1970～78）

1970年前後の大学紛争は全国に波及し、全国各地のキリスト教大学も紛争の渦に巻き込まれた。学会の発行する<キリスト教史学>、<キリスト教史学会報>には、大学紛争について記す記事は見られない。しかし、69年の第20回大会は上智大学での開催予定を変更し、市ヶ谷の私学会館で一日のみの大会となったことは、前編の最後に記されている。大学紛争の後遺症は、様々の形で長く残っていた。

70年代において、キリスト教史学会は安定期であった。しかし、学会創立時の発展的な勢いはすでに無く、停滞した安定であった。大会は東京横浜地区と地方を交替で定期的で開催された。この当時の大会にはほとんど毎年、三笠宮が出席された。この事は大会開催を引受けた大学や地元が強く意識する事となり、各種の便宜が提供され、また学会も少なからず意識の中にあった。

理事選挙は2年ごとに実施されたが、圧倒的に現職の理事が当選した。1970年の役員会は下記のように構成されていた。

理事長 海老沢有道
専務理事 片子沢千代松
財務理事 佐々木忠一
常任理事 荒井献 助野健太郎 時田信夫 波多野和夫 秀村欣二 松村菅和
理事 印具徹 重久篤太郎 松田毅一
幹事 伊沢平八郎 吉田寅 近藤幸雄 村田安穂 矢島浩
監事 佐々木四郎 田村喜久蔵

1971年大会の総会では、理事選挙にもとづき新たに推薦理事として相沢源七氏、深沢秀男氏、峯崎康忠氏が追加された。特に各地方から理事を選考したことが特徴であった。73年にはパチェコ（結城了悟）師が理事に加わり、花島光男が幹事長として片子沢専務理事の仕事を補佐する事になった。

75年には八代崇氏が常任理事に、松本富士男氏が幹事に就任、79年に松田毅一氏が理事に再度就任、太田淑子氏、西連寺育子氏、清水紘一氏が幹事に就任した。監事は田村喜久蔵氏が退任し、森田和好氏が就任した。

一方、76年に波多野和夫、時田信夫、重久篤太郎、峯崎康忠の諸氏が、78年に深沢秀男氏が理事を、矢島浩氏が幹事を退任している。

この当時の会誌『キリスト教史学』及び「キリスト教史学会報」の発行は、頁数も少なく低調であった。編集委員会はまだ組織されていなかった。当時の会誌の奥付には年度内発行の日付が記されても、発行はしばしば遅れ、一時期は2年度分を同時に作成し発送する時もあった。しかし、1976年発行の30集より英文の内容要旨が付されることになった。また同年、会誌『キリスト教史学』は郵政省より学術刊行物の指定を受ける事ができた。これによって会誌の発送に関わる郵送料は格段に安くなった。同時に申請した「キリスト教史学会報」は指定を受ける事が出来なかった。

70年代は、大阪万博に象徴される、急激な経済成長期でもあった。経済的余裕が見られるようになり、海外旅行が一般にも可能となった時であった。学会による海外視察研修旅行は、その草分けとも言えるものであった。

学会主催の海外視察旅行は、第1回が71年、第2回は73年に実施された。

第1回聖地巡礼・欧州研修旅行の報告が、会報67号に次のように掲載されている。

「本学会創立20周年を記念して催された本学会の聖地巡礼・欧州キリスト教史跡見学の旅行団は、去る3月21日、羽田を発ち、イスラエル全国・ギリシヤのアテネ及びコリント、ローマ、スイスのチューリッヒ、ドイツのハイデルベルグ、マンハイム、フランクフルト、ローレイ、ケルン、そしてパリ、ロンドン、コペンハーゲン等を巡遊、アンカレッジを経て4月10日午後、21日ぶりに全員無事帰国、意義ある大旅行を終った。今回の旅行はイスラエル共和国、及びギリシヤ政府の援助の下に多大の便宜を与えられ、殊にアテネではギリシヤ正教会総大主教と、ローマでは教皇パウロ六世とに謁見を賜り、（後略）。団長、海老沢有道、副団長、片子沢千代松、松村菅和、助野健太郎、聖職者11名、教職16名、総勢56名」当時としては大旅行団であった。

同様に、第2回聖地巡礼欧州研修旅行報告が会報71号に掲載されている。

「一行参加者36名は48年3月2日、東京発アリタリア航空南回りで香港、バンコク、ニューデリー空港を経てアテネ着、アテネ市内見学、テルアビブへ飛び、エルサレム到着。エルサレム、ベツレヘム、死海沿岸、エリコ、ナザレ、ガリラヤ湖、ハイファ、カイザリア、ヨッパ見学、テルアビブからアテネ空港を経てイスタンブール到着、イスタンブールから黙示録に表されている七つの教会、すなわちペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキア、エペソ、スミルナのほか、コロサイ、ヒエラポリスの教のあとを訪ねた。トルコからローマへ行き、パンテオン、ヴァチカン、コロセオ、カタコンベ、フォロロマーノ、アシジを見学、最後は教皇パウロ六世に謁見して南回りで4月5日帰国した。団長、片子沢千代松専務理事、藤尾英二郎、（後略）」黙示録の7つの教会の跡を訪ねる旅行は、本邦最初の企画であった。（会報69号）

この旅行では参加者の渡辺みきさんが旅行中体調をくずし、ローマで帰りの飛行機に一旦は搭乗したものの、長

時間の飛行には耐えられないと診断され、飛行機より下ろされ、即入院、一行が羽田に到着した時には、彼女がローマで帰らぬ人となった事を聞かされた。

第2回旅行の後で第3回旅行の計画が発表されたが参加者が満たなかった事により中止、その後何度か発表された旅行計画はいずれも実現しなかった。また、第1回、第2回旅行の参加者には学会に入会して頂く事になり、多数の新入会員により会員数を増加させたが、それは必ずしもキリスト教史の研究者ではなかった。

1973年、文化の日に、会員の石原謙氏が文化勲章を受賞された。石原謙氏は学会創立時より評議員を勤め、理事会制度になった時も最初の一期は理事を務められたが、その後1965年以降は学会の顧問を続けられた。晩年の大会への参加はほとんどなかったが、石原氏は学会の象徴的な存在として学会員を間接的に指導された。特に受賞の前年に相次いで出版された『キリスト教の源流』、『キリスト教の展開』（岩波書店）は90歳を越えた先生の晩年の記念碑的著作であった。

石原氏は1976年に逝去されたが、この頃は学会創立当時に中堅研究者として活躍された方々が相次いで亡くなられた頃でもあった。

V. 改革の機運（1979～84）

1980年代の前半は、1970年代の安定期より変化が始った時期であった。すでに1979年の総会において会則を変更し、理事の任期は今までの2年間より3年間となった。従来の隔年実施の理事選挙は、理事の任期が短すぎる事、さらに理事選挙にかなりの費用がかかる事などの理由により変更されたものであった。

80年の大会は妙高高原のホテルで合宿により実施され、従来の大会とは趣を異にするものであった。野外でカトリック、プロテスタント合同の礼拝を持ったこと。プログラムの中にディスカッションが組み込まれ、学会の運営に関しての話合いが持たれた。学会が現状の中で何かをしなければならないという気持ちへの現れであった。参加者が共に同じ宿舎で、秋の夜長を語り合いつつ過ごしたことは会員相互の親密さを増すことができたと共に、学会のこれからの方向性を互いに語り合う貴重な時ともなった。

この年に学会の大きな事業計画として「各個教会史目録」の編纂が発表され、会員に協力要請の文書と調査記入用紙が発送された。これはすでに作業が開始されている『日本キリスト教歴史大事典』の編集と並行して進める予定で、会員に調査の協力を依頼する文書と調査記入用紙を送った。残念ながら会員の十分な協力を得られず、中断してしまった。海老沢氏は会報でしばしば、県別に目録のモデルの発表を試みたが、その後も相次いで発行される全国の各個教会史の情報を十分に把握する事が出来ずに中断してしまった。

82年に神戸の松蔭女子大学で開催された大会では、第1日を無事に終了したが、第2日には台風接近による警報が発令され、兵庫県内の学校は休校になっているとの情報により、休校中の大学に迷惑をかける事はできないとの判断で急遽、大会第2日の研究発表及び、午後に予定された市内キリスト教史跡の見学等、全ての予定を中止することにした。しかしこの中止の連絡が不徹底で、多くの会員に迷惑をかける結果になった。理事会はこの事態を深刻に受止め、反省と共に、大会第2日目に研究発表を予定していた会員に、研究発表の機会を用意することは、学会の責任と考え、12月4日に東京・神田三崎町の日本大学経済学部で、大会第2日を開催した。

さらに学会としては、このような事態を招いた事は、理事会の体質に原因するものと考え、抜本的な組織改革を進める必要に迫られた。海老沢理事長はこの頃よりしばしば入退院を繰り返して、自らの健康上の理由で理事長を辞任することを表明していた。理事会は会則の改訂を考えたが、この審議は遅々として進まなかった。しかし、学会の組織改革と理事の若返りは、差迫った緊急の課題であるとの認識は学会全体に広がっていた。

VI. 改革の始まり（1985～88）

1985年に実施された理事選挙は、今までにない大きな変化をもたらすものであった。従来の選挙は圧倒的に現職の理事が選出される傾向が強く、選挙によって新人が選出されることはなかった。そのため、85年2月、海老沢理事長は会報90号で、自らの理事長引退の意思を示し、理事選挙では新人の選出を強く希望する旨の文章を発表した。さらに6月発行の会報91号では松本富士男氏が「わが学会の活性化について」と題して具体的な提案を発表した。選挙の結果はこれらの意向を受けたものであった。選出されたのは得票順に、海老沢有道、荒井献、片子沢千代松、松本富士男、秀村欣二、吉田寅、工藤英一、佐々木忠一、武田清子、であった。規定では8名の選出であるが、佐々木、武田は同数のため当選は9名とされた。理事就任辞退した武田氏を除く8名の選出理事が集合し新役員会の構成を協議し、以下のように決定した。

理事長 秀村欣二
専務理事 松本富士男
財務理事 佐々木忠一
理事 青山玄 荒井献 海老沢有道 片子沢千代松 工藤英一 気賀健生 杉井六郎 出村彰
吉田寅 結城了悟
幹事長 花島光男
幹事 太田淑子 西連寺育子 清水紘一 岸野久 小川早百合 大村修文 中村茂 盛節子
監事 佐々木康友 森田和好

秀村氏は海老沢、片子沢両氏とほぼ同世代で、自らの理事長就任は理事会の若返りにはならないとして、理事長就任を固辞したが1期3年間に限りとの条件で引き受けられた。20年以上続いた海老沢理事長、片子沢専務理事の時代が終った。今まで長期に理事を担当された印具徹氏に対しては名誉会員とした。名誉会員はその後、続いてはいない。さらに87年に岡部一興氏が監事に加わった。

秀村理事長による3年間は学会の運営に様々の改革を進める大きな転換期となった。今までは首都圏にいる理事を常任理事とし、常任理事会が理事会の機能を果たし、一般の理事は年間一度、大会時の全国理事会に出席するのみであったが、この区別を廃止し一律に理事とし、理事会通知も理事全員に通知する事とした。

会誌『キリスト教史学』は85年発行の39号より、今までの白い表紙から現在の灰色の表紙に変わり、また表紙は横書きとなった。特に86年発行の第40号は、前年の青山学院大会のシンポジウム『迫害と殉教』を特集した。会誌での特集は第4号のキリシタン特集以来である。

86年東北学院大会では、初めて『研究発表要旨』を発行した。研究発表の内容を一冊の冊子にまとめる事は、かつて実施した事があるが、この年からは現在まで継続されて、大会準備の重要な仕事となっている。

「キリスト教史学会報」が現在の体裁になったのは84年3月発行の第88号であるが、毎号とも用紙の色を変えて発行するようになったのは85年12月発行の92号からである。この92号は秀村新理事長就任の挨拶と、海老沢前理事長が退任の挨拶と思い出として「学会小誌」を記しており学会の節目を表す記念号ともなっている。

秀村理事長時代の最大の改革は、長く理事会で検討を続けてきた会則の改正案を作成し、87年の聖心女子大学大会に報告、承認された事であった。この主な改正点は、会誌の編集を専務理事の職務と明記したこと、庶務理事を新設したこと、幹事を運営委員と名称変更し、運営委員会は庶務理事が主宰すること、会費の金額を会則には記さず総会で決定するとしたことであった。また同時に理事選挙規定も改正されたがこれは今まで慣例としてきたことを成文化したもので、理事選挙規定の内容を変えるものではなかった。

87年6月20日、工藤英一理事が荻窪の東京衛生病院で急逝された。学会にとって秀村理事長の下で新理事として2年しか経過していなかったが、1期のみという条件で理事長を引き受けた秀村理事長の後任を自他共に予定していた学会としては大きな衝撃であった。

1988年2月に『日本キリスト教歴史大事典』が出版された。計画の始まりより実に12年掛かった大事業であった。教文館創業100周年の記念出版で当時、教文館会長で会員でもあった武藤富男氏が、海老沢理事長に提案した

企画であった。これにはキリスト教史学会が総力を挙げて参加協力した。この事典の編纂について海老沢氏は会報 96 号に苦勞と思いを記している。

編集方針はエキュメニカルな立場をとり、教会相互の理解促進、教会が日本の近代化に果たした役割を紹介し自信と自覚、将来を考える素材の提供、さらにはキリスト教に理解を欠く一般文化界に理解を深める基礎的知識を提供するために百科全書的性格を持たせて編纂を進めるというものであった。

海老沢氏が自ら編集委員長となり、編集委員は 34 人中、26 人が会員であった。執筆者は約 1300 人に達するが、その内、会員は後日入会した者を含め約 120 名で、執筆者の 1 割弱、当時の会員数約 260 名の約半数が項目執筆に参加したことになる。そのため編集担当者の苦勞も大きく、多くの執筆者は事典原稿の経験なく、執筆要項を無視した原稿に悩まされ、また原稿の催促にも苦勞した。キリスト教史の研究者の底辺の狭少さを痛感したと記されている。

しかし、この事典の出版は一般には好評であった。海老沢氏は十分に原稿に目を通すことができなかつたことが心残りであった。晩年の海老沢氏の書齋で常に手元に置かれていたこの事典には、あらゆる頁に細かい字で、何らかの訂正が記入されていた。

Ⅶ. 新しい動向 (1988～96)

秀村欣二理事長は、就任当初の予定通り 1 期 3 年で退任し、88 年、理事長に就任したのは秀村氏とは師弟関係にある荒井献氏であった。

荒井献理事長就任は、南山大学で開催された大会の総会で報告された。荒井氏の理事長就任は学会全体からも当然の決定であると受け止められると共に、新しい体制の成立に対する大きな期待が寄せられていた。荒井氏の理事長就任と共に、花島光男が庶務理事に、太田淑子氏が理事に、大沢晴美、原島正、渡辺久美子の 3 氏が運営委員に就任した。さらに川島第二郎、マッケルウエイン両氏が監事に指名された。

荒井氏は理事長就任に当たり、会報 97 号で以下のように学会への期待を記している。

1. 学会員の学問的質の向上を目指すこと。学会の同好会的要素を否定はしないが研究発表の内容は互いに研究者として高め合う努力をすること。そのために、大会での研究発表の方法等などの検討をすること。
2. 日本を中心とする東洋キリスト教史と西洋キリスト教史研究者が併存している学会の特徴を生かし、専門領域での高い研究水準を維持しつつ、両者の研究課題、方法などを共通テーマなどで交換し合うこと。
3. 大会への家族同伴の参加は、日本では珍しくても外国では当たり前のことでありこの学会の伝統的な家族的雰囲気大切にしたいこと。

この方針は多くの会員より支持され、これ以後の学会運営に常に意識された。大きく変わった事は大会の内容が充実すると共に、年ごとに質の向上を見た事である。大会の準備では、大会のテーマを設定し、シンポジウムなどでは、その目的をはっきりと明示する事であった。しかもそのテーマは、単に歴史の一部、一分野でなく、現代の問題として、キリスト教史を研究する者がその意味と、研究者としての立場を問う事を心掛けた。

90 年、関西学院大学セミナーハウスでの大会は合宿形式で実施され、前年の天皇代替わりに関わる各種の議論を踏まえ「今、なぜキリスト教史か」と題するシンポジウムを実施した。このシンポジウムは、第 1 部「反省——戦時下のキリスト教」、第 2 部「展望——これからのキリスト教史研究はいかにあるべきか」と二部に分けて実施さ

れ、キリスト教史研究の意味と責任を問うものであった。

91年、フェリス女学院大学での大会では、フェリス女学院大学弓削達学長による「キリスト教史研究の現代的視角」の講演があった。ここでは、地球環境破壊の問題、女性の視点での歴史の見直しの問題、平和維持が困難である問題を取り上げ、将来を見る時に欠かすことのできない重要事項を端的に説明され、前年のシンポジウムに続き、キリスト教史研究者の使命と責任を問う講演として記憶されている。

また、フェミニズムの立場からのキリスト教史研究の再検討が主張されている事を受け取め、キリスト教と女性の問題が意識された。すでに87年の聖心女子大学大会で「キリスト教史における女性」をテーマとして取り上げた事に続き、93年、恵泉女学園での大会では「女性宣教師と教育」、94年、東海大学での大会では「キリスト教とセクシュアリティ」をテーマとした。これらのシンポジウムは、小檜山ルイ氏の『アメリカ婦人宣教師』、松本宣郎氏の『ガリラヤからローマへ』という著作の話題性もテーマ設定の理由であった。

特にこの時のシンポジウム準備は、担当者が大会前日より合宿で検討、準備をした事は、以後のシンポジウム準備のモデルともなった。

88年、南山大学での大会では「宣教の歴史としてのキリスト教」、92年、岡山のノートルダム清心女子大学での大会では「日本における宣教と教育の歴史をめぐって」を、95年、北陸学院での大会では「北陸におけるキリスト教の宣教と学校教育」をテーマとし、教育と宣教はキリスト教史の研究にとっては恒常的な問題、関心事である事を示している。

91年の理事選挙に伴ない、新たに、岸野久、木寺廉太、豊田浩志、原島正の諸氏が理事として加わるとともに、財務理事は佐々木氏の後任として気賀健生氏が、また運営委員として石原綱成、龍口奈里子が就任した。さらに94年には盛節子氏が理事に、小檜山ルイ、中島昭子の両氏が運営委員に就任した。

1992年1月3日、海老沢有道氏が突然に召天された。以前より健康の不調を訴え、入退院を繰り返しており心配されていたが、逝去の知らせは学会にとって大きな悲しみであった。海老沢氏の葬儀は1月8日、江古田教会で執行され、荒井理事長、秀村前理事長が弔辞を述べた。(会報104号)

海老沢氏は85年、理事長を引退後も理事として止まり、理事会は90年、海老沢氏に、会則に規定は無いが名誉理事として長年の学会指導に感謝した。

海老沢氏は生前親しくしている方々に「ゑびすとら」という手紙を送っていた。先生の死後、この「ゑびすとら」の全てを復刻出版出来ないだろうかとの声があがり、理事会はこの企画に積極的に賛成し学会の事業とすることを決定した。「ゑびすとら」の内容紹介とその意味については荒井理事長が「はしがき」の中で説明しているので、その文章を引用する。

海老沢先生から『ゑびすとら』を頂いていた方々をご存知のように、これは読んで字のごとく、先生の「手紙」である。しかしその内容には、個人消息のほかに先生ご専門の各種資料等の紹介や解説、その時々には研究中あるいは執筆中の事柄についての中間報告、研究の方法やプロセスの紹介なども含まれており、この「手紙は全体としてキリスト教史研究の具体的な手引にもなっている。

さらに、一方においてこの中に既刊の研究論文や著書の補遺や訂正が記されており、他方において著書や論文の中にこの『ゑびすとら』がしばしば引き合いに出されているために、今でもこれのバックナンバーに対する問い合わせが多い。『ゑびすとら』は一九六〇年より九二年まで、不定期ではあるが、30年間発行が続けられ、最後の91号は病床の中で作成されて、幸子夫人により発行されている。しかし、残されている各号の発送先のリストを見ると、第1号から第91号まで全号贈られている方は案外少なく、今のままでは研究者の照会に十分応え切れない状態なのである。しかも、これの中には、先生が執筆し公にされた夥しい数に上る文章の全てに通し番号が付けられ、目録として整理されているため、これは総じて30年間の先生の全仕事・全業績の完全な記録となっている。その内容も、キリシタ

ンに留まらず、カトリック、プロテスタント、ハリストス、に至るキリスト教史全般の領域に及んでいる。

狭義の「手紙」の部分には、研究余滴や小さなエピソードなど「身辺雑記」が事細かに記されているので、これは同時にキリスト教史学会の記録となっているのである。

『ゑびすとら』の復刻出版の作業は女性の運営委員を中心に進められた。詳細な索引が作成され、さらに海老沢ゼミの会報を添えて 94 年 1 月に出版された。この企画は一口 5000 円の協賛金を募り協賛者に一部を贈呈した。海老沢夫人もこの企画を快く承諾、協力下さり、大量に買い求められて、海老沢氏の関係者に配付された。

『ゑびすとら』の出版は反響を呼び、キリスト教史、とりわけキリシタン史の研究者からの問い合わせ、注文があった。某古書店の古書目録には 45000 円の値が付けられていた。

海老沢氏の亡くなる前年 1 月に片子沢千代松氏が横須賀市民病院で逝去された。片子沢氏は 1947 年、関東学院中学校高等学校に勤務すると同時に海老沢氏と共に学会設立を計画準備し、創立当時より事務部門を担当、学会運営の中核であった。理事会制となった時からは専務理事として海老沢理事長の片腕となり学会運営を支えた。そのため学会事務局は創立時より現在まで関東学院に置かれている。関東学院大学神学部助教授としてキリスト教史を担当すると共に、日本キリスト教史の入門書を出版された。毎年の大会では全ての出席者の名前を覚え、特に懇親会の時に、第 1 回の大会より、過去の大会の会場、特別講演、参加者などを正確に記憶し、第 1 回より順番に述べる事は、氏の特技であった。告別式では秀村欣二前理事長が弔辞を述べた。氏の逝去後、夫人より史学会の記録写真、資料などが関東学院に託されている。

この当時は、学会創立時からの会員が相次いで亡くなられた。90 年、時田信夫氏、田村喜久蔵氏、91 年、佐々木康友氏、92 年、相沢源七氏、93 年、曾根暁彦氏、助野健太郎氏、94 年、高谷道男氏、森田和好氏、95 年、大和久泰太郎氏、松田智雄氏等の逝去が続き、当時の会報には毎号のように弔辞、追悼文が続いた。

95 年 1 月の阪神淡路大地震は神戸市を中心とする大災害であった。関西学院大学神学部の宮谷宣史氏が会報に寄せた「お礼とご報告——阪神・淡路大震災によせて——」の文章は、会員に強く記憶されるものであった。

Ⅷ. 現状と課題 (1996~99)

1990 年代の後半は、20 世紀の終焉を意識することであった。それは同時に、敗戦 50 周年の節目として、戦争の意味を再度問いなおすこと、またキリスト教史学会が 1949 年に創立されてから 50 年を経過し、半世紀の歩みを振り返りつつ、現状の分析、将来の展望を考えることでもあった。

96 年の大会は、これらの要素を意識しつつ葉山の湘南国際村センターを会場に合宿形式で開催された。敗戦 50 年を記念し、明治学院が『心に刻む』を発行し、学院の戦争責任を公に告白し、また、青山学院大学の学生が『青山学院と学徒出陣』を発行し戦争時の学院の姿を掘り起こし、問題を提起したこと。50 年前までの戦争が何であったのか、キリスト教史を研究する者としてどのように受止め、考えるかを問い直すものであった。

97 年の大会は、長崎純心大学で開催された。聖日のミサに続く開会式で、片岡千鶴子学長は、「私共の純心女子学園も原爆で 213 名の学生の生命と校舎の全てを失い、原爆を抜きには学園の歴史は語れないものになっています」と、そして大学キャンパスのある三ツ山の地の意味を語られ、ここで大会を開くこと自体に、大きな意味があることを参加者に語られた。長崎大会の意義はこの言葉に全てが込められていると言える感銘深い挨拶であった。この挨拶は会誌 52 集の冒頭に掲載されている。

学会創立 50 周年事業について最初に検討されたのは長崎大会での役員会であった。この時に結論はなかったが、会誌を 50 周年に向けて充実させる方向で考える事とし、編集委員会を拡大して検討を続ける事になった。そのため、50 周年及び 51 周年に発行される会誌に掲載するべく 98 年、99 年の大会で特別のプログラムを企画する事

にした。また、学会の 50 年史を会誌に掲載する事とし、前半を吉田寅氏、後半を花島光男が執筆する事になった。

98 年の文京女子短期大学での大会、99 年の函館市での第 50 回大会はこのような意向を含んで開催された。

1997 年 4 月に秀村欣二氏が逝去された。海老沢、片子沢両氏の亡き後、秀村氏は最も古い会員であり、1 期であるが理事長にも就任された。東京大学退官後、青山学院大学、東海大学で教授を勤め、さらに東洋英和女学院短期大学学長をに就任し、理事長退任後の 89 年には大会の会場を提供して下さった。静かで温厚な人柄は会員の誰からも愛され、先生が出席されているだけで、大会や部会は重みを感じた。特に研究発表を聞いて頂く事は特に若い研究者にとって大きな励みとなった。学会の大会、部会などの際は必ず夫人同伴で出席され、学会の家族的な雰囲気の特徴でもあった。秀村氏の葬儀は日黒の今井館聖書講堂の密葬と、港区の東洋英和女学院高等部講堂で告別式が行われ、学会からは荒井献理事長と島創平氏が弔辞を述べた。

さらにこの年は日本聖公会首座主教の現職であった八代崇氏、さらに、松田毅一氏が逝去された。

97 年は理事選挙の年であった。理事定年制は秀村氏が理事長退任後に提案したもので、理事会はこの提案を時間を掛けて検討し、70 歳を理事の定年とする案を、96 年の総会に提案し理事選挙規定を改訂した。この選挙は理事定年制による最初の選挙であった。これにより今まで理事を務められた気賀健生、杉井六郎、結城了悟、吉田寅の 4 氏が定年で理事を引退し、新たに大村修文、片岡千鶴子、茂義樹、田代菊雄の 4 氏が理事に、山田愛氏が運営委員に加わった。また専務理事は松本富士男氏より、豊田浩志氏に交替した。

監事は川島氏が退任し、定年で理事を引退した吉田寅氏が監事に就任した。マッケルウエイン監事は 99 年 4 月、急逝され、その後任として気賀健生氏が就任する事になった。マッケルウエイン氏の逝去は学会の大きな悲しみであった。

学会は外部の学会などへの参加、協力を努めて来た。特に日本学術会議には、会員選挙のための学術団体として毎回の登録をしている。これは一定の条件を満たした学術団体として認められている事を意味している。また毎年の日本学術会議宗教学研究連絡委員会主催のシンポジウムには、後援団体としてその企画に参加している。このシンポジウムの最近のテーマは左記の通りである。

93 年 「死と宗教」

94 年 「環境と宗教」

95 年 「現代社会の危機と宗教」

96 年 「現代と宗教の危機」

97 年 「危機の宗教」

98 年 「20 世紀の日本における宗教と宗教研究」

99 年 「世紀末と宗教」

会員では荒井献理事長（94 年）、吉田寅氏（97 年）、原島正氏（98 年）がこのシンポジウムでの発題を担当した。95 年より 3 年連続して「危機」という言葉が入っているのはオウム真理教事件に拠るものであろうか。

99 年の函館大会の総会で、荒井理事長より韓国・延世大学の閔教授から、国際協力の研究組織設立の呼掛けがある事が報告され、総会はこの事を大筋で承認した。11 月にソウル市の延世大学で開催された設立会議には、学会より気賀健生、太田淑子、波多野和夫、李省展、花島光男の 5 人が代表として出席し、「東北アジアキリスト教史学協議会」の憲章を取り決め設立を決定した。主な内容としては、協議会の趣意書、目的として、三国（中国、日本、韓国）のキリスト教史研究者の交流と親善、研究資料の交換、隔年の研究会と大学院生対象の会議開催、事務局、役員、財政、会費、などで、発足に当っては韓国側に多くを依存する形での出発となった。残念ながら、この設立会議には中国の代表は出席できなかった。会議の経過と、憲章の全文（英文）、今後の学会としての対応、準備などについては会報 121 号に掲載し発表された。これに対して、一部の会員より、中国には台湾を含むのか、との公開質問状が提出された。（会報 122 号）

協議会設立はキリスト教史学会創立 50 周年を記念するにふさわしい事業となった。

学会は創立 50 年を経過したが、会の規模は必ずしも大きくはなっていない。会員は 10 年前に約 250 名であったが、現在は会員の増加で 310 名を前後している。毎年若い研究者の入会があるが、一方では毎年、若干の退会者、逝去者があり、現在の会員数は毎年ほとんど変化していない。学会の運営を安定させるためには会員の増加による財政の安定が必要であるが、キリスト教史の研究者は必ずしも多くはないため、会員を増やす事は容易でない。会員が各自の責任を果たすと共に積極的な参加意識が必要とされる。

学会はキリスト教史という特定の研究分野でありながら、その研究対象が、古代史、原始キリスト教、聖書学、中世史、宗教改革、近代・現代キリスト教、さらに日本キリシタン史、幕末期より現代までのプロテスタント、カトリック、ハリストス、アジアのキリスト教、キリスト教美術等、キリスト教に関わる全ての歴史を含み、これらの異なる研究領域に係わる者が研究発表により、互いにその方法論、共通の課題を発見、交換し合う事が可能である。会員の多くは他のキリスト教関係の学会などにも参加しており、学会は各種の関係の学会を横断的に連結する役を果たしていると言える。さらに、学会の創立時より、他に先駆けてエキュメニカルな立場でカトリック、プロテスタントが自由で平等に交流を続けて来た。また小さい学会であるが故に互いに家族的な親しい交流を続けることができた。

21 世紀に向けて、いま学会に求められている事は、広い国際的な視点と、現代が抱えている問題に的確に対応する判断力であろう。学会が先人の努力により継承してきた遺産を 21 世紀に受け継いで行きたい。

資料 第 21 回より 50 回までの大会報告

《第 21 回大会》 1970 年 8 月 25 日、26 日 弘前学院短期大学 青森県弘前市

<25 日> 開会式に続き、午前、共通テーマ「東北地方とキリスト教」に関わる研究発表、午後、研究発表
特別講演 「日本思想とキリスト教の交流」石田一良
総会后、記念晩餐会

<26 日> 午前の研究発表は一部時間切れで省略、昼食後、バスでの市内と近郊の史跡巡り、岩木山神社、革秀寺、長勝寺、五重塔、弘前城、考古館、弘前城、弘前教会、カトリック教会を見学

《第 22 回大会》 1971 年 8 月 27 日、28 日 横浜カトリック・センター 横浜市磯子区

開会式では横浜教区の荒井勝三郎司教より祝辞

<27 日> 開会式後午前と午後の研究発表
特別講演 「ヘロデ時代におけるエルサレムとクムラン」新見宏
新見氏が自ら撮影したスライドの映写

講演の後、総会、その後に記念晩餐会

奨学金授与 八代崇 英国教会史研究

倉松功 宗教改革史研究

<28 日> 午前の研究発表の後、午後はバス二台に分乗し横浜市内史跡見学 三溪園、山手地区、山手カトリック教会、関内地区、横浜海岸教会などを見学、横浜駅解散

《第 23 回大会》 1972 年 8 月 25 日、26 日 桃山学院 大阪市阿倍野区

<25 日> 開会式後、午前、午後の研究発表、特別講演「人間回復をめざして」飯島幡司

<26 日> 午前、研究発表 昼食後、総会
奨学金授与 出村彰 スイス宗教改革史研究
午後 シンポジウム「人間回復をめざして」

司会 藤間繁義

発題 山内貞夫、出村彰、八代崇、武邦保

終了後レセプション、続いて閉会式

《第24回大会》 1973年8月24日、25日 桜美林大学 東京都町田市

共通テーマ 「日本人のキリスト教受容」

<24日> 開会式に続いて共通テーマに関わる研究発表桜美林大学の招待によるレセプション

午後の研究発表の後、左記の特別講演「中江藤樹と切支丹宗」清水安三

<25日> 午前研究発表、午後は総会后特別講演「日本人のキリスト教受容」大内三郎

講演後、同じテーマでシンポジウム

司会 波多野和夫

発題 杉井六郎、尾原悟、佐伯真光

《第25回大会》 1974年8月23日、24日 東北学院 仙台市

<23日> 開会式の後、二部に分かれて研究発表

午後は研究発表後、特別講演「イエスの歴史的研究の方法をめぐって」荒井献

懇親会 東北学院同窓会館

<24日> 午前 研究発表 午後、バスによる市内史跡見学 青葉城、仙台博物館、東北大学図書館、キリスト教

共同墓地など

《第26回大会》 1975年9月26日、27日 立教大学 東京都豊島区

<26日> 午前及び午後の研究発表 終了後、懇親会

<27日> 午前の研究発表、午後 総会后、研究発表

特別講演「明治前期におけるキリスト教高等教育の特質」海老沢有道

閉会式

《第27回大会》 1976年9月24日、25日 西南学院大学 福岡市西区

<24日> 午前及び午後の研究発表

懇親会 於、三四郎

<25日> 午前 研究発表、午後 総会、研究発表

奨学金授与 荒井奨学金 松本富士男 キリスト教図像学の研究

松村奨学金 峯崎康忠 軍人伝道の研究

中田奨学金 木下清 永田方正の研究

特別講演「キリシタン民衆と倫理」海老沢有道

閉会式

《第28回大会》 1977年9月16日、17日 国士館大学 東京都町田市

<16日> 午前及び午後の研究発表

懇親会 於、千寿閣

<17日> 午前 研究発表、午後 総会后、研究発表

特別講演 「背教者ユリアヌスとキリスト教」秀村欣二

《第 29 回大会》 1978 年 9 月 15 日、16 日 平安女学院短期大学 京都市上京区

<15 日> 開会式、午前及び午後、研究発表

懇親会 於、パレスサイド・ホテル

<16 日> 午前 研究発表、午後 総会、研究発表

特別講演「お雇い英学教師としての宣教師」重久篤太郎

閉会式

《第 30 回大会》 1979 年 9 月 21 日、22 日 国際基督教大学 東京都三鷹市

<21 日> 開会式、午前、午後の研究発表

懇親会 大学食堂

<22 日> 午前 研究発表、午後 総会、研究発表

特別講演「ドイツ教会史における清教主義——敬虔派を中心として——」松田智雄

閉会式

《第 31 回大会》 1980 年 9 月 26 日、27 日、28 日 燕ハイランドホテル 新潟県妙高村燕温泉

<26 日> 夕刻集合 開会式

特別講演「写本から見たイエス像の図像学——ラブラ本とドロゴ 本を中心に——」松本富士男

<27 日> 研究発表、総会、ディスカッション、懇親会

学術奨励賞 清水紘一 キリシタン史の研究

<28 日> 聖日合同礼拝 司式 青山玄神父

午前の研究発表後、昼食、閉会式

《第 32 回大会》 1981 年 9 月 25 日、26 日 横浜カトリックセンター 横浜市磯子区

<25 日> 開会式後 研究発表の希望者多く二部制

午前の研究発表、午後 総会

特別講演「明治キリスト教の社会的展開——横浜を起源として——」工藤英一

懇親会

<26 日> 午前、研究発表、午後、バス二台で市内キリスト教史跡見学、三溪園、山手地区、横浜開港資料館等、

《第 33 回大会》 1982 年 9 月 24 日、25 日 松蔭女子学院大学 神戸市灘区

<24 日> 開会式、午前及び午後の研究発表、総会

学術奨励賞 宮谷宣史 アウグスチヌスの研究

特別講演「天正少年使節四百年にあたって」結城了悟

懇親会

<25 日> 台風接近による警報発令のため、全てのプログラムとバス見学を中止

《第 33 回大会 第 2 日》 1982 年 12 月 4 日 日本大学経済学部 東京都千代田区神田三崎町

9 月の松蔭女子学院大学大会で、中止された第 2 日目に予定されていた 3 名の研究発表を実施

他、レジュメ発表 1 名

《第34回大会》 1983年9月23日、24日 日本大学経済学部 東京都千代田区三崎町

- <23日> 午前及び午後の研究発表の後、総会、懇親会
学術奨励賞 盛節子 アイルランド・キリスト教史
- <24日> 午前と午後の研究発表
特別講演「湯浅治郎の人と業績」太田愛人
閉会式

《第35回大会》 1984年9月28日、29日 福岡女学院短期大学 福岡南区

- <28日> 午前、午後とも研究発表、総会
懇親会 於、パーソナルホテル・リユー
- <29日> 午前 二部制の研究発表
午後、公開講演（於、福岡中部教会）「福岡県のキリスト教」海老沢有道
閉会式

《第36回大会》 1985年9月20日、21日 青山学院大学 東京都渋谷区

- <20日> 午前 研究発表、午後総会
シンポジウム
司会 荒井献
発題 秀村欣二、清水紘一、豊田浩志
懇親会 青学会館
- <21日> 午前と午後の研究発表
バッハ生誕300年記念公開講演「バッハのキリスト像——音楽による福音のキリスト教からの解放——」
杉山好（東京大学教授）

《第37回大会》 1986年9月26日、27日 東北学院大学 仙台市

- <26日> 午前と午後に研究発表、総会
学術奨励賞 木ノ脇悦郎 エラスムスの研究
公開講演「宣教初期における武士層とキリスト教」工藤英一
懇親会 於、東北学院同窓会館
- <27日> 午前の研究発表の後、午後はバスによる市内史跡見学

《第28回大会》 1987年9月25日、26日 聖心女子大学 東京都渋谷区

- 大会テーマ 「キリスト教史における女性」
- <25日> 午前の研究発表
特別講座「十六世紀朝鮮開教をめぐる」ルイズデメディナ（イエズス会歴史研究所）
研究発表、総会、懇親会
- <26日> 午前、午後の研究発表
特別公開講演「ヨーロッパ中世社会と婦人」阿部謹也（一橋大学教授）
閉会式

《第39回大会》 1988年10月9日、10日 南山大学 名古屋市昭和区

<9日> 青山神父司式によりカトリック、プロテスタント合同の主日礼拝、開会式に続いて研究発表
特別講演「宣教の歴史としてのキリスト教」スィングドウ神父（南山大学宗教文化研究所）
学術奨励賞 川島第二郎 ゴーブルの研究

<10日> 午前 研究発表、午後 バスで名古屋市内のキリスト教史跡を見学

《第40回大会》 1989年9月15日、16日 東洋英和女学院短期大学 横浜市緑区

<15日> 開会式、午前 研究発表

午後 総会、研究発表

学術奨励賞 出村みや子 オリゲネス研究

特別講演「キリスト教と風土」鈴木秀夫（東京大学教授）

<16日> 午前、午後とも二部制の研究発表

閉会式

《第41回大会》 1990年9月11日より13日 関西学院大学セミナーハウス 兵庫県三田市

テーマ「今、なぜキリスト教史か」

<11日> 夕刻集合、開会式

シンポジウム第一部 「——反省—— 戦時下のキリスト教」

司会 杉井六郎

発題 太田淑子、気賀健生、出村彰、土肥昭夫、真山光彌

<12日> 午前 研究発表、午後 総会

学術奨励賞 岸野久 ザビエル研究

シンポジウム第二部 「——展望—— これからのキリスト教史研究はいかにあるべきか」

司会 荒井献

発題 小川早百合、茂義樹、高木孝子、豊田浩志、原島正、盛節子

<13日> 午前 研究発表 閉会式

《第42回大会》 1991年9月20日、21日 フェリス女学院大学 横浜市中区

<20日> 開会式、午前の研究発表、午後 総会、

学術奨励賞 中村茂 イギリス教会史研究

研究発表 申込多く、全て二部制で実施

特別公開講演「キリスト教史研究の現代的視角」弓削達（フェリス女学院大学学長）

<21日> 午前 研究発表

閉会式後、横浜外人墓地見学

《第43回大会》 1992年9月18日、19日 ノートルダム清心女子大学 岡山市

<18日> 午前の研究発表、昼食後、総会、研究発表

学術奨励賞 大村修文 トレルチの研究

蔵田雅彦 韓国キリスト教史の研究

シンポジウム テーマ「日本における宣教と教育の歴史をめぐって」

司会 出村彰

発題 青山玄、高木孝子、松縄善三郎

懇親会 於、岡山ロイヤルホテル

<19日> 午前の研究発表、昼食後バスによる史跡見学閑谷学校、備前焼会館

《第44回大会》 1993年9月17日、18日 恵泉女学園短期大学 東京都多摩市

<17日> 開会式、午前の研究発表 昼食後、総会

学術奨励賞 小檜山ルイ アメリカ婦人宣教師の研究

シンポジウム テーマ「女性宣教師と教育」

司会 気賀健生

発題 戸田徹子、パメラ・ノヴィック、小檜山ルイ

代表質問 塩入隆、花島光男

懇親会 於、パルテノン多摩第一会議室

<18日> 午前、午後の研究発表後、閉会式

《第45回大会》 1994年9月16日、17日 東海大学湘南校舎 神奈川県平塚市

<16日> 開会式、午前 研究発表、昼食後、総会

学術奨励賞 藤野豊 ハンセン病とキリスト教研究

シンポジウム「キリスト教とセクシュアリティ——『ガリラヤからローマへ』松本宣郎著（山川出版）
をめぐって——」

司会 豊田浩志、三小田敏雄

発題 松本宣郎（著者）

代表質問 足立広明、木寺廉太、出村みや子

<17日> 午前及び午後 研究発表、閉会式

《第46回大会》 1995年10月13日、14日 北陸学院高等学校 金沢市

<13日> 開会式、午前 研究発表、午後 総会

学術奨励賞 塩野和夫 日本組合基督教会史研究

北陸学院創立110周年記念行事 シンポジウム（北陸学院と共催）

「北陸におけるキリスト教の宣教と学校教育」

司会 杉井六郎、星野命

発題 青山玄、大隅啓三、鈴木進、波多野和夫

代表質問 茂義樹、小檜山ルイ

懇親会 於、石川厚生年金会館

<14日> 午前 研究発表 閉会式

午後 北陸学院創立110周年記念式典

《第47回大会》 1996年10月9日、10日、11日 湘南国際村センター 神奈川県葉山町

<9日> 夕刻集合、夕食後、開会式

特別講演「アウシュヴィッツを『記憶』して——現代神学の射程——」金子啓一（立教大学）

「ナチ体制とキリスト教徒——カトリック住民の態度を中心に——」井上茂子（姫路獨協大学）

<10日> 午前の研究発表後、昼食、総会

学術奨励賞 J.W.克蘭メル 『来日メソジスト宣教師事典』の編集

シンポジウム テーマ「戦争と平和 ——キリスト教の歴史に問う——」

司会 太田淑子、原島正

発題 「古代キリスト教と兵役」木寺廉太

「責任としての歴史認識——青山学院大学プロジェクト 95 の活動をふりかえって——」

雨宮 剛（青山学院大学）、北田道也（上智大学大学院）

懇親会

<11日> 午前 研究発表、閉会式

《第48回大会》 1997年9月13日、14日、15日 長崎純心大学 長崎市三ツ山町

<13日> 午後 長崎市内キリスト教史跡巡り（片岡千鶴子学長、越中氏、結城了悟師による案内）

西坂の二十六聖人記念碑と記念館、春徳寺など

<14日> 日曜日のミサ 司式 結城了悟神父

開会式 午前の研究発表、午後、総会と研究発表

学術奨励賞 荒井英子 キリスト教〔救癩〕史の研究

特別講演「遠藤周作文学における殉教」結城了悟

懇親会 於、ホテル・グランメール

<15日> 午前の研究発表、昼食

特別講演「現代のカクレキリシタンの信仰世界」宮崎賢太郎（長崎純心大学教授）

閉会式

《第49回大会》 1998年10月10日、11日 文京女子短期大学 東京都文京区

<10日> 開会式、午前の研究発表、昼食後、総会

学術奨励賞 山田望 ペラギウスの研究

特別研究発表 テーマ 「キリシタンの世紀 ——日本イエズス会とアジア——」

司会 井手勝美、清水紘一

研究発表

「キリシタン時代マカオにおける日本イエズス会の教育機関について」高瀬弘一郎

「イエズス会宣教師と琉球」五野井隆史

「ザビエル時代の信徒使徒職 ——インドとの比較において」岸野久

<11日> 主日礼拝 司式 伊藤高章（聖公会）

午前、午後とも研究発表 閉会式

《第50回大会》 学会創立50周年記念大会

1999年9月17日、18日 サン・リフレ函館（勤労者福祉センター） 北海道函館市

<17日> 開会式、午後 総会、研究発表

学術奨励賞 西村裕美 クエイカーの研究

杉崎泰一郎 中世キリスト教史の研究

特別公開講演「函館とキリスト教」

司会 赤城泰、豊田浩志

「函館トラピストの百年」高木正義（巖律シトー会函館トラピスト修道院院長）

「M.C.ハリス監督をめぐって」島典英（遺愛女子高等学校教諭）

「東方教会の日本宣教者ニコライ」松平康博（日本ハリストス正教会釧路教会司祭）

懇親会 於、五島軒本店

<18日> 午前、午後の研究発表の後、閉会式

（編集者注：一部表記について書き換えを行なった）